

2024年度

総合型選抜Ⅲ アジア事情探究型

適性検査

1 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

伝統中国において、「いくさ」の文学、戦いの文学として、筆頭にあげられるのは、(1)白話長篇小説『三国志演義』（全百二十回）である。著者と目される羅貫中（生没年不詳）は十四世紀中頃の元末明初、千年近くにわたり語り物や(a)シバイなど民間芸能の世界で語り伝えられた種々の三国志物語を収集し、陳寿の著した(2)正史『三国志』をはじめとする正統的な歴史資料と突き合わせ整理、集大成し、堂々たる大歴史小説『三国志演義』（以下、『演義』と略す）を完成した。ちなみに、(3)北宋以来、語り伝えられた講釈に、「講史」と呼ばれる連続長篇歴史物のジャンルがあり、これが『演義』の母胎となった。

『演義』の時間帯は、後漢（二五―二二〇）末の乱世が、曹操の魏、劉備の蜀、孫権の呉の三国に分化し、やがて魏の系統を引く司馬氏の西晋が三国を次々に滅ぼして、全土を統一するまでのほぼ百年である。『演義』は退廃した後漢王朝の失政によって社会不安が激化する状況のもと、(b)コンキユウした民衆を吸収した道教系の新興宗教「太平道」の大反乱「黄巾の乱」が勃発する時点から幕を開ける。『演義』世界における第一世代のスーパースター、曹操、劉備、孫堅（孫権の父）、劉備の義兄弟の関羽・張飛らは、すべてこの黄巾討伐を機に、物語世界に登場するのである。

以来、数限りない戦いが繰り返されるが、『演義』世界きつての大きな戦いといえ、まず、曹操が当初、最大のライバルだった袁紹を撃破し、華北の覇者となった「官渡の戦い」、全土統一の野望を膨らませた曹操が江南攻略に乗り出し、同盟を結んだ孫権と劉備に（実際に戦ったのは孫権軍のみだが）惨敗を喫した(4)「赤壁の戦い」に指を屈するだろう。その後、蜀に(c)イキョした劉備が隣接する漢中に攻め寄せた曹操軍と激戦のあげく、これを撤退させた「漢中の戦い」、曹操も劉備も没した後、劉備の軍師だった諸葛亮が大国魏に挑戦しつづけた「北伐」も、『演義』後半の大きなヤマ場だが、「官渡の

戦い」や「赤壁の戦い」に比べれば、局地戦であり、スケールが小さいというほかない。

もっとも、「天下分け目」の官渡および赤壁の二つの戦いにしても、『演義』の描写の重点は、決戦の場における武力衝突ではなく、相手の弱点を巧妙に突く知的な前哨戦に置かれており、それが顕著な特徴だといえよう。たとえば、「官渡の戦い」では、袁紹の配下だった曹操の旧友許攸が、脱走して曹操のもとに逃げ込み、曹操の手の内を読みながら、袁紹の食糧基地を急襲する名案を授ける。喜んだ曹操はこれを突破口に、一気に劣勢をはねかえすという具合に、虚々実々の駆け引きに満ちた前哨戦のほうがはるかに興趣に富む。

「赤壁の戦い」の場合はさらに手が込んでいる。孫権軍の総司令官周瑜は、公称百万の曹操軍に、わずか二万の軍勢を率いて立ち向かうが、この圧倒的劣勢をくつがえすべく、(d)ケンボウジュツスウをもつて鳴る曹操の上手をゆく巧妙な策略を用いる。スパイ作戦を駆使して曹操に揺さぶりをかけたあげく、老将黄蓋と綿密に打ち合わせて、説得力のある偽装降伏計画を練り上げたのである。さしもの老獪な曹操もこれに一杯食わされ、点火すれば火の玉と化す船団を率いて降伏して来た黄蓋をうかうか受け入れたために、あつというまに水陸の陣地に火がつき、壊滅的打撃をうけて敗走したのだった。これまた、決戦はむしろあつけない「結末」にすぎず、重点はあくまでも、知的前哨戦の紆余曲折にあるといえよう。

こうしてみると、むろん関羽や張飛ら猛将の鬼神のような個人的武勇の見せ場は多々あるとはいえ、『演義』における大なる戦いは、武の戦いというより、知の戦いの要素がつよい。いいかえれば、古来、武より文が重視される中国では、「いくさ」もまた一種の「政治」であり、『演義』はそうした側面をも如実に示していると思われる。「官渡の戦い」にしても「赤壁の戦い」にしても、前者は軍事的には圧倒的劣勢だった曹操が、後者ではやはりそうだった周瑜が、知謀によって逆転大勝利を遂げた。そのプロセスを微に入り細を穿って描写しているところにも、『演義』の他に類を見ない面白さがある。

総じて、『演義』は戦いの文学であると同時に、先述のように、後漢末の乱世から三国分立を経て西晋の全土統一までを

描き切った大歴史小説である。『演義』は一治一乱、統一と分裂を繰り返す中国の歴史の流れをしつかり見据えながら、詠嘆に溺れることなく戦いの(e)レンサを描いている。こうした成熟した視点は、同様に、北宋の「講史」から生まれたとおぼしい、もろもろの戦いを描く作品に、ついぞ見られないものである。(5)『演義』が古びることなく、時代を超えて現在もお、読まれつづけているのは、おそらくこのためであろう。

(井波律子『ラスト・ワルツ―胸躍る中国文学とともに』による)

問1 波線部(a)～(e)の片仮名を漢字にしてください。

(配点10点)

(a) シバイ

(b) コンキユウ

(c) イキョ

(d) ケンボウジュツスウ

(e) レンサ

問 2

傍線部(1)「白話長篇小説」とあるが、『三国志演義』をはじめとして明代に成立した著名な白話長篇小説を「四大奇書」という。「四大奇書」にあてはまらないものを、以下の①～④の中から一つ選びなさい。(配点 4点)

- ① 水滸伝
- ② 西遊記
- ③ 紅楼夢
- ④ 金瓶梅

問 3

傍線部(2)「正史」とあるが、中国歴代王朝の公式の歴史書である「正史」はある共通する形式で書かれている。その形式の名前を漢字で答えなさい。(配点 6点)

問 4

傍線部(3)「北宋」とあるが、宋代の儒学は「宋学」などと言われるように、儒学の画期の一つとされる。南宋期に主として福建省で活動した儒家で、『四書集注』などを著した宋学の大成者として知られる人物の名前を漢字で答えなさい。(配点 6点)

二

次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えなさい。

中国を語るのは難しい。人口13億人以上を抱える巨大国家である。多民族で、各地域の言葉や文化も多様であり、経済格差が大きい。依然、思想や結社の自由が制限されており、内側に入らなければ見えないことも多い。

中国のイメージが定まらない理由は他にもある。それは、(1)中国を描くコンテキストが「政治化される」程度が高いということである。読み手・書き手の位置によって、描き出される像が大きく異なることもある。

経済成長を遂げるにつれ、中国に対する圧力は日々、強くなっている。最近では、汚染や(a)ケツカンのある中国製品についての報道が加速しているし、コピー製品の(イ)氾濫や中国人犯罪の増加に対する批判もある。マスメディアは、読者の興味を引く話題を選び取り、中国像を描いていく。そのため、「中国脅威論」や「中国(b)ホウカイ論」など、極端に単純化された見方が目立つようになっていく。

一方で、学術研究はどうだろう。マスメディアとは異なるのだろうか。いや、人間が人間を見る目において、完全に「政治性」を排除することなど不可能である。「政治性」というのは、研究者（描く者）と被研究者（描かれる者）の関係である。つまり、研究者がどのような意識を持って、どのような手法で、何を説明するかによって、それは変わってくる。

特に、中国において政治的・社会的に「敏感」とされる問題を調査する場合、「政治性」はより鋭敏に浮かび上がる。こうした問題を公にする際には、「社会の安定を脅かさないよう」(c)ハイリヨシなければならぬ。現地の人々は、密接な関わりを持つことなくしては、情報も提供してくれず、心の内まで見せてくれることもない。

なかでも、社会的に弱い立場に追い込まれている「弱者」の声は、外部の者には届きにくい。特に、外国人にとっては、

弱者にアクセスすることさえ難しく、たとえアクセスできたとしても、弱者の視野から物事を捉えるには、相当な時間と労力がかかる。

筆者は、大学院時代、湖南省の農村の小学校で1ヶ月半、(2)上海市の中学校でも1年あまり、エスノグラフィック・スタディ (ethnographic study: 民族誌的な研究) の手法によるフィールドワークを行った。当時、中国研究を志し、さまざまな本を読み、先行研究をまとめたが、現場の情景が浮かび上がってこなかった。何が何でも現場に飛び込み、自分の身をもつて感じ、考えたかった。そうした気持ちから、大学院修了後も、農民や出稼ぎ労働者に関するエスノグラフィック・スタディを行ってきた。

「エスノグラフィー」(ethnography) は文字通り、「民族」(ethnos) について「書かれたもの」(graphy) であり、写真やフィルムなど映像記録も含まれる。人類学の手法がベースになっており、特定の民族の特徴を描き出すのが中心であるが、現代社会におけるさまざまな組織や集団、個人にも(注)焦点を当てる。フィールドワークという経験的調査手法を通して、研究対象である集団や人々の社会生活を観察し、体系的に記述を整えていく。

このような手法では、研究者自身が「道具」になる。つまり、研究者が自分の存在・感覚・言葉を頼りに、長期に渡って現地の人々と関係を築いていく。そして、そのプロセスにおいて、研究者は内部者 (insider) として何らかの役割を得るのである。

筆者は中国の学校では、クラスの副担任や日本語の授業を担当し、農村調査では農業灌漑かんがいや学校建設のプロジェクトに関わった。出稼ぎ労働者に対する調査には、中国のローカルNGOの研究チームの一員として参加した。

しかし、筆者は人類学者がエスノグラフィーを行うように、長く継続的に現地の人々と共に生活することはできなかった。また、職を得てからは、長期に渡る調査を行うことはほとんど不可能になった。そのため、「エスノグラフィー」ではなく、

「エスノグラフィック・スタディ」なのである。

とはいえ、可能な限り、何度も同じ地域を訪れ、内部者の視野を得られるよう努力した。中国社会は深く入り込まなければ、表面を(1)撫でるだけで終わってしまう。地域の、集団のメンバーにならなければ、問題は見えてこない。逆に、仲間としての関係性が得られれば、さまざまな情報を共有することができる。また、弱者を理解するには、人の痛みを自分の問題としてとらえる姿勢を持って、共に感じ、考え、もがく中で得られる感覚や視野を大切にしなければならぬ。

急激な市場経済化によって競争が激化する中、人々は自らの利益を守ろうと焦り、ぶつかり合う。限られた資源を奪い合い、エゴイズムが(2)渦巻く中、(3)社会の矛盾が浮き彫りになる。

筆者はこの、人間性がむき出しになった中国に関心を持った。人間を、社会を見ていて、「なぜこのようなことが起こるのか」「もっと知りたい、理解したい」という思いに駆られた。知らず知らずのうちに、惹きつけられていった。しかし、社会に入り込んで調査するうちに、苦しくてたまらなくなり、逃げ出したくなることさえあった。

(4)北京で生活していた2001年、自転車でさまざまな場所に行った。外国人であることが目立たないように、ラフな格好でボロ自転車に乗っていると、警察に「農民工」と間違えられ、身分証の提示を求められたことがある。

「農民工」とは、「農民」でありながら、「工人」(ワーカー)であるという、矛盾した(d)ガイネンである。中国には農業戸籍と非農業戸籍を区分する制度があり、農業戸籍を持ちながらも、都市に出稼ぎに来る人々を「農民工」と呼んでいる。(ホ)暫定的に居住する許可を得なければ、農村に連れ戻される。

北京では、重要な会議が開かれる時期に入ると、警察は規制を強める。許可証を持たない農民工たちは次々にバスに乗せられていた。パスポートも外国人居住証も(e)ケイタイしていなかった筆者も、危うく連れて行かれそうになった。

中国の戸籍制度は一種の身分制度である。社会保障、土地所有、納税、教育や医療に至るまで、どこに戸籍地があるかに

よって、内容が変わってくる。中国において、経済成長が著しいにもかかわらず、所得格差が縮まらないのは、戸籍制度が主要因であると筆者は考えているが、筆者が教えている中国人留学生のなかには、「今では移動は自由にできるし、戸籍は関係ない」と話す者もいる。都市部出身で、戸籍制度の恩恵を受けていると、この制度の持つ不平等さが実感として分からないのだろう。

農業だけでは生活できない、或いは都市部で新たなチャンスを見出したいと考える農民たちは、農民工として都市に出稼ぎに来るが、戸籍所在地でない場所では、住民サービスを限定的にししか受けることができない。保険にも未加入の者が多く、医療や教育も十分に受けられない。学歴の低い単純労働者は、働いても、働いても、ステップアップできず、何年経っても、都市社会の主流には入っていけないのである。

日本も、「ワーキングプア」に代表されるように、中国における農民工と共通する問題を抱えている。私たちはあまり気付いていないが、中国が経験しているような根の深い矛盾を、日本も抱え込んでいるのではないか。エスノグラフィック・スタディで中国の人々と関わりながら、そのような見方をするようになった。「自分がどこに立っているのか」を自覚しようとするなかで、中国ではなく日本を、そして、自分自身を見ていることに気がついた。

中国の問題は

A

ではないのである。

(阿古智子『貧者を喰らう国―中国格差社会からの警告【増補新版】』による)

問1 波線部(a)～(e)の片仮名を漢字にしなさい。

(配点10点)

(a) ケツカン

(b) ホウカイ

(c) ハイリョ

(d) ガイネン

(e) ケイタイ

問2 波線部(イ)～(ホ)の漢字を平仮名にしなさい。

(配点10点)

(イ) 氾濫

(ロ) 焦点

(ハ) 撫でる

(ニ) 渦巻く

(ホ) 暫定

く

問7

傍線部(4)「北京」とあるが、現在、北京の中心部に位置し、故宮博物院や人民大会堂などと隣接する広場の名前を漢字で答えなさい。

(配点6点)

